

Brio の人 ——鈴木啓二先生を送る——

原 和 之

鈴木先生を親しく存じ上げるようになったのは、私の駒場着任以来ということになるので、もう十数年になるだろうか。大学院大学化を経て大きく変わった古巣に舞い戻り、学生と教員の間あたりをふらふらと漂っているような気分の私だったが、当時フランス科の主任をなさっていた鈴木先生のもとで副主任をつとめることができたおかげで、ようやくめぐるしい駒場の現実に向き合う準備ができたように思う。法人化がなり、18号館への研究室の移転が準備されていた慌ただしい時期のことで、通常の仕事以外にもさまざまな業務が発生していたに違いないが、そんななか実質見習いの副主任の OJT に丁寧につき合ってくださいのみならず、年度末に駒場で開催されることになっていた仏文学会関東支部大会の責任者として準備にあたり、剩え放送大学の次クールの企画を着々と進めていらっしゃる鈴木先生の姿を見て、なるほど駒場で生きるというのはこういうことであるのだなあと、密かに覚悟を固めたものだった。

とはいえそれがけっして悲愴な覚悟になりえなかったのは、ひとえに鈴木先生のお人柄によるところと思う。鈴木先生はそうした忙しさを、あくまで「快活に」引き受けていらしかった。もちろん内面のことは分からない。ただ鈴木先生が何であれ物事に取り組まれる際の熱意には、いつも幾らか上機嫌の成分が含まれていて、つついそれに引き込まれてしまう、といったところがあった。とりわけそれを感じたのは、ご一緒することになった放送大学の仕事の時である。鈴木先生は放送大学の客員教員として、この「フランス語入門 I ('06)」の制作で中心的な役割を担われたのだが、すでに何年もつとめられてきたこの仕事に、創造的に、そして何より楽しげに取り組んでいらしかった。入門者むけの簡単なフランス語でも不自然でないシチュエーションを考えるなかで先生が着想された、子供たちを主人公にしたスキットのアイデアや、文化紹介としてパリや地方都市の住人に自分の街を語ってもらうという企画が、瞬く間に現地での撮影やロケを含む大がかりなものとなってゆくのを、この種の仕事の経験の乏しかった私ははらはらしながら見守っていたのだが、そうして予想もしなかった分量となっていった仕事がむしろ心躍るチャレンジと感じられたのは、ひたすらよいものを創ろうという鈴木先生の熱意に私がすっかり感化され、引っぱられていたからに違いなかった。

学生たちに尋ねてみると、同じことはどうやら教室での鈴木先生についても言えるよ

うだ。学部前期課程のフランス語の授業にフランス語による発表と討論の形式を取り入れ、またフランス科の内定生に簡単とは言えない詩論のフランス語テキストの要約を毎回課すなど、鈴木先生の学生に対する期待と要求は大きい。また院生に課題を与えては面談するということを繰り返すご指導のスタイルを、「千本ノック」と評する学生がいたようにも仄聞する。しかし同時に彼らが口を揃えて強調するのは、あのやや早口で語られる、知識やエピソードの圧倒的な、時として内定生を青ざめさせるほどの情報量であるとともに、語り口から迸る若々しい——「少年のような」——情熱であり、そしてその情熱に引き込まれ、巻き込まれるうちに、いつしか新しい領域に踏み出していたという幸福な経験である。

高みから指示し、あるいは教え授けるといふのは違ふ、鈴木先生の教育スタイルは、私のなかでは先生のもう一つの側面、すなわち打ち込んだ音楽^{メロマニックス}愛好家としての姿と自然に結びついている。皆さんご存じの通り、鈴木先生は幼い頃から始められたヴァイオリンもいま続けておられ、偶々フランス科に音楽家の多かった2009年には、学生らとともに室内楽のコンサートを開催された。私自身は聴くことの叶わなかったコンサートだが、演奏者として参加した学生の一人は、練習から本番までご一緒する中で感じたのが、まさに同じ伝染性の、ひとを惹きつけ巻き込むエネルギーであったと回想している。思うに鈴木先生のスタイルの原点にあるのは、そうした音楽を介した人との関係ではないか。演奏家が弟子に、あるいは共演者に音楽について何かを伝えようとするとき、知識を伝達するだけでは足りないし、ましてや難しいフレーズを簡単にしてやるといったことは問題にならない。届けるだけでは足りず、響かせなくてはならないのだが、そうした共鳴の出来事を、学問であれ音楽であれ、あるいはフランス語であれ日本語であれ、「表現」ということに取り組む熱意と真剣さを、そして何よりそれが生み出す喜びを示し続けることで目指してこられたのが鈴木先生なのだと私は思う。

論文審査の席などでは、鋭い質問やコメントを通して、ご専門のフランス文学はもとよりフランスの芸術、歴史、政治等への、鈴木先生の幅広い関心と深い学識に接する機会が屢々あった。そうした学識を背景として行われた、近代フランス文学における「文明」という壮大な主題を掲げた学部の講義は、当時の学生の記憶に今なお残るものであると聞く。その鈴木先生が、フランスという対象はどこまで迫ろうと決して十分に把握し得ず、その意味で地域文化研究はつねに挑戦^{デファイ}であり続ける、と繰り返しおっしゃるとき、私などは殆ど挫けてしまいそうになるのだが、しかしそれはおそらく、この不可能な挑戦^{デファイ}に、あくまで——そしてこの言葉に込めうるあらゆる意味における——brio を以て身を投じる鈴木先生の姿とともに記憶されて、初めて意味を持つ言葉なのだろうと思っている。

鈴木先生、長い間たいへんお世話になりました。